

哲學研究

第二百九十六號

第二十五卷
第十一冊

永遠・歴史・行爲 (承前)

田邊 元

三

アウグステイヌスの時間論に於ける普遍的現在が、無方向的一般として過去と未來とを並列的に無差別化する空間性をもつことは、その由來を追究すると、過去に對する現在の志向が記憶、未來に對する現在の志向が豫期として規定せられる結果、兩者が離れ離れとなり、相互の間に内面的媒介を缺く爲ではないか、といふ見解は前節に觸れた所である。時の考察が現象學的でなければならぬことを見た我々にとつては、此點を更に一層綿密に分析してその積極的側面を闡明し、同時に前節に於て到達した時と永遠との媒介關係を念頭に置きて、過去と未來との關係が一方的に規定せられる時の特色を維持しながら、永遠に於ける兩者の否定轉換に於て循環還歸の媒介を含む所以を明にすることは、重要な課題となる。これは同時に永遠に對する信仰と關係をもち、信仰の歴史的時間的意識に對する媒介の問題と關聯する。その十分なる究明は私の力の及ばない所ではあるが、現在可能なる範圍に於て多少でもこれに對

し分析を試みようと思ふ。

前に觸れた通り過去に對する現在の志向、換言すれば現在に於て成立する過去の意識、としての記憶は、我々が時の外から時を觀察する如き立場に立つとすれば、その内容は決して此現在に止まるものでなく、未來に屬する現在にも常に存するものとして、過去から未來に連なる意識の持續と解することが出来る。否、現在といふものを過去と未來との間にある點の如くに空間的に見ることをやめ、意識そのものの内在的立場に立つとしても、現在は厚みをもつものとして、過去が未來へ滲透する動性を含む限り、過去の記憶は常に現在に止まらず現在を超えて未來へ關係するものといはれるであらう。これはアウグステイヌスはつきり認めた所である（『告白』第十一篇第二十八章）。ベルグソンが記憶を以て純粹精神の機能と解し、その持續に於て精神の持續を見ようとしたのは、理由なきことではな~~い~~。併し此様ないはゆる純粹持續の直觀が、時を具體的に成立せしめるかといふならば、さうは簡單に考へられぬであらう。成程過去はそれ自らを保存するといふ純粹記憶の持續性は、時の成立にとつて必要な契機である。併し斯かる持續のみしか~~ない~~ならば、それは却て記憶として意識せられ持續として直觀せられることも不可能ではないか。何となれば持續が持續として直觀せられるには、却て持續でないもの、持續の否定なるもの、即ち非連續であり同時態である如きものとの關係が必要であり、過去が過去として記憶せられるには、これと區別せられる現在の自覺がなければならぬからである。それでは現在を過去から區別する特徴は何であるかといふに、それはベルグソン自ら正しく指摘した通り行爲の可能といふことであり、更に具體的にいへば、精神の純粹記憶を横に物質が切る、持續の否定、とその回復といふことでなければならぬ。現在は斯かる意味に於て記憶の否定であり、その回復肯定である。

それは過去の記憶の單なる持續でなくして、却てその否定的肯定或は絶對否定といふべきものである。此否定媒介なくして現在はない。従つてまた是なしに現在に於ける過去の意識としての記憶も、持續の意識として成立すること出来ぬ。持續は却て持續の否定的媒介としてのみ成立するのである。従つてまた現在に於て過去と區別せられそれと對立せしめられる所の未來も、又過去がその未來へ滲透するといふことも、單に直接なる持續の直觀としての純粹記憶のみでは不可能である。抑も未來は現在の行爲を過去の記憶に媒介し、前者の發生せしめる事態としての、行爲の結果を、後者の媒介によつて豫測し豫料することに於て成立するものに外ならない。それは過去の絶對否定としての現在に於ける行爲の媒介を自覺するものとして、必然に過去と關係する。未來は現在に於ける絶對否定の契機としての、過去を否定し、過去に對立する否定的方向の、自覺に外ならない。元來現在に於ける行爲といふものは、現在に持續する過去に伴つて、之を否定する未來の方向が其半面にはたつき、而もそれは現在の行爲を通じてそれが實現せられることを求める對立争闘が現在の底にあることによつて、促されるのである。現在の行爲は此對立を止揚して争闘を和平統一に齎さんとする主體の運動である。過去と未來とを越えて之を統一する永遠が、現在の超越的根柢として、現在を否定的に高め回復する轉換に於て、行爲が成立する所以である。未來は斯かる意味に於て過去の持續を否定する破壊的方面と、行爲に於て過去と媒介せられる建設的側面と、二つの側面をもつ綜合態でなければならぬ。現在は此綜合を成立せしめる絶對否定の轉換點に外ならない。絶對否定は交互否定的なる二方向の轉換媒介として、循環的構造を含むから、現在は必然に過去と未來との對立と相即とを契機として含むのである。未來の否定的方向の自覺なくして過去の記憶が成立し得ないことは、後者なくして前者が成立たないのと選ぶ所はない。未來はアウグスティヌス

の如く單に之を無媒介に豫期に屬せしめることは出來ぬ。それは現在に於ける行爲的豫測豫料に屬するのである。一方に於て過去を否定せんとする破壊的方向と、他方に於てそれが行爲により過去と媒介せられんとする建設的方向との綜合として、不安と希望との交錯する實踐的豫料に未來は成立する。アウグスティヌスも時の考察の初に於ては、未來を主として行爲に關して論じたのは、或は之を感知した爲かも知れない（『告白』第十一篇第十八章）。行爲を離れて豫期といふも意味は無い。何となれば、豫期とは行爲的なる心構を謂ふのだからである。併し未來の過去に對する否定的肯定的二重の媒介性に注意するならば、之を記憶から引離すことが出來ないのも明白でなければならぬ。時を専ら記憶に基かしめようとしたベルグソンとは反對に、之を主として豫料に於て成立するものと解したのは周知の如くコーヘンであるが、何れも其説を極端に推進めるならば、一面に偏倚することを免れない。却て兩者共に現在に於ける行爲の絶對否定的轉換の相對立する契機として、對應相即するのである。何れか一方だけで他方なしに成立するものではない。寧ろ何れを主とする時間論も相當の理由を以て主張し得られることが、時の構造に本質的なる二律背反を示すのであつて、時の具體的なる理解は此二律背反を媒介する辯證法の外にはあり得ないことが推定せられる。併し若しさうならば、時の成立の中心は現在の行爲的轉換媒介にあるといはなければならぬのであつて、それに對し時の本質を過去の記憶に認めようとするのも未來の豫料に置かうとするのも、何れも一方に偏した見方といふ外ない。而して現在をアウグスティヌスが現在の現在といふ自己超越の媒介的構造に於て捉へた如く、その媒介の否定的轉換の底には、絶對無の超越が根柢として存するのでなければならぬ。それが永遠である。彼が時の成立の根柢と認めた、我々の精神の現在に於ける延長は、永遠の象徴である。現在は時が永遠に觸れる所に成立つ。絶對無の永遠が

現在に於て時を無限に新にするのである。過去からの記憶の持続を時の本質とするのは、時の往相すべき永遠の、時に對する超越的同一性を時に投射したものであり、未來に對する豫料に時の本質を認めようとするのは、永遠が時に還相する無限の更新を、時の成立と解するものである。實は何れも他をその半面に豫想するのであつて、相互に媒介せられることによつてのみ時が成立するものなることは、以上によつて略、明にせられたであらう。

記憶に於ける過去の持続といふものだけでは時は成立しないことは、抑も過去といふものが現在に對し又未來に對するから、始めて過去たるのであつて、之を否定に於て肯定する現在の行爲が無ければ、持続といふことも成立たないことは、既に記憶といふものが、單に過去の保存といふ單純なる機能に屬するものではないことを知らしめる。元來單なる保存といふものが抽象的なのであつて、具體的にはそれは否定を契機として之を更に否定することにより自己を回復肯定するところの媒介性を、意味するものでなければならぬ。保存といふ概念は實は辯證法的綜合に於てなければ成立することは出来ないものである。ベルグソンが多く比喩的な語で敘述する持続の直觀も、斯かる否定的媒介としてのみ具體的に理解せられる。知性の幾何學化空間化といふ持続の否定は、行爲に結附くものであつて直觀を破壊するものであるといふのが、彼の主張であるけれども、時は如何に持続であるとしても、この行爲の否定的媒介なしには成立しないこと、裏に見た如くである。持続の直觀といふのは、この否定的媒介から離れ、或は之を抑止することではあり得ない。たゞ却て之を自己に轉ずることによつて之を越えることではなければならぬ。若し此媒介を認めないとすれば、直觀は持続といふことも出来なくなり、従つて時の否定に導く外ない。持続といひ過去といふことが、既にその契機として否定を含むのでなければならぬことを暗示する。併し過去の持続は此否定を含蓄暗示するに

止まり、之を顯現するものではない。それだからこそベルグソンが、否定の媒介を無視して之を直觀の直接内容と主張することも出來た譯である。寧ろ否定は現在に於ける行爲、その媒介としての未來の對立否定性、を通して間接に過去に關し顯はにせられるのである。ハイデッガーが人間存在を過去に關して被投的と規定した如く、我々は過去に關しては無媒介にそこに投げられ直接に自己の在り方を規定せられるのである。否その投げられてあるとか、既存的内容を直接に負はされて居るとかいふことさへ、未來に對する自由投企を媒介として始めて反省せられるのであるから、それ自身では斯かる反省媒介も未だ無い所の直接態に於てあるのである。それは其限りに於て否定を含まない。従つて運動變化もまたない直接存在であり、又有限存在である。然るにこれに對し否定的關係に立つ未來といふものは、それ自身に於て否定を對目的に含むものであり、従つて否定的に媒介せられたものとして無限性を有するものである。一般に否定は直接肯定を豫想しこれに媒介せられたものとして、肯定よりもより具體的である、否定の積極性といふものは更に否定が絶對否定即肯定に轉せられる可能性を意味するものとして、潛勢的に無限態であり超越の現成である、といはれるが、未來は正に斯かる性格を有するのである。こゝに未來の過去に對する高次性が成立つ。過去から未來へは流れるけれども、逆に未來から過去へ流れることはない、といふ時の非可逆性一方向性、の由つて來る所はここにある。何となれば未來の高次性は媒介を意味するから、低次なる過去を自己の媒介とはするけれども、低次なる過去は高次なる未來を自己の媒介とすることは直接には出來ぬからである。辯證法は有の根源としての絶對無を媒介として有を思惟する方法である。その絶對無に直接的なる有を媒介せしめる發端が、有の自己否定としての否定に外ならない。それだから否定は有の根源たる絶對無の尖端として、その背後に有の根源を負ふに由り、却て有

よりも高次であるといはれるのである。直接的なる有としての過去が過去であるといふことは、必然に之を自己否定に陥れ、それを否定するものとしての未來を顯はならしめる。斯かる未來はそれの本質上直接なる有でなくして寧ろ有の否定である。併し單なる否定といふものはあり得ない。否定が否定として思惟せられる限り實は同時に肯定なのであつて、否定即肯定なる絶對無の轉換の上でその契機として否定として現れるのである。即ちその轉換としての現在に於て、未來は過去の否定として而も過去を媒介とすることにより思惟せられるのである。それは現在の絶對否定の契機としての否定であるから、却て絶對無の永遠の動的尖端たる意味をもち、過去の有よりも高次の媒介存在となる。未來の豫料といふものは過去の記憶と異なり、後者が既定の有限存在として、縦それが我々に直接に負はされたものであり、我々の存在を被投的ならしめるものであるとはいへ、既に我々に知られ我々に顯はなるものとして其限り何等の不安をも我々に惹起するものではないのに反し、前者は絶對無の根源から發する否定の尖端として、我々が過去の有の立場から決して完全には豫定し盡すことの出來ぬ不可測なるものであり、我々に對し未知なるものとして不安を惹起するものである。それは過去の有を否定することに於て過去のなる我々の存在をも否定する恐を有するものであるから、過去の被投に對する未來の投企といふのは、過去のなる我々が隨意に企畫することを意味するものでなく、却て過去と共に死することを通し否定に隨順することによつて之を超え、それに於て復活甦生すると共に、絶對否定の媒介たる限りの過去の有を未來の創造に於て回復する斯かる否定的媒介の、豫料を意味するものでなければならぬ。未來の投企とか豫料とかいはれるものは、單に構想力の觀想的想像に成立するものではない。構想力は如何に實踐とか制作とかいふことを想像しても、それ自身實踐的でも制作的でもない。飽くまで非行爲的觀想に止まる。ただ

死即生の轉換に媒介せられた主體的存在自體の自覺内容としてのみ、投企豫料が未來的に成立するのである。ハイデッガーに於ても死の覺悟を通じて、始めて企畫的の自己の存在性が成立すると解せられるが、併しそれは右の如き否定的媒介の絶對無の現成を意味するのでなければ、具體的に超越を成立せしめることは出來まい。豫料 anticipationといふ語が不安を含蓄することも、右の如き否定轉換の事態を暗示するといはれるであらう。とにかくも未來は無の有として否定媒介的であり、永遠の超越的根源の還相を媒介するものであることが、之をしてそれ自身直接的なる過去の有に對し、超越的なる高次性を有せしめることは否定出來ない。約言すれば、未來は直接の有限的内在的存在でなくして、有の根源たる絶對無の超越が無限なる否定として有に觸れる所に成立する媒介存在でなければならぬ。それは絶對無の現成、永遠の還相、たる現在の行爲的轉換に於ける否定媒介の契機としてのみ存在するのである。それであるから、未來は未だ無く、從つて不可測であり、我々に限り無き不安を惹起するものであるけれども、それにも拘らず、それは直接の有を超える有の根源としての絶對無の動的尖端であるから、此超越的根源に轉ぜらるる主體的自己にとつては、それが即ち自己の創造的内容であり自己と轉換媒介せらるる絶對の現成なることが保證せられる。若し現在の超越的根柢たる絶對無に轉ぜられる我々の自己の、超越に對する關係の意識を信仰といふならば、未來の否定性が却て肯定性に轉ぜられ無が有の媒介であることを、此信仰と交互媒介的に確信する意識の態度は、希望に外ならない。信仰は希望と相即する。覺悟は希望の否定的側面として希望と表裏相伴ひ、前述の不安を身に引受けながら希望の肯定によつて、不安の原因たる不可測の禍害を行爲的にその否定性より肯定性満足歡喜に轉じ得る確信に外ならない。信仰が希望と交互に媒介せられることが、超越の内在に對する交互媒介であり、永遠の時に對する往相即還相

の相即關係である。現在は單なる無媒介の直觀であることは出来ない。アウグスティヌスの現在の現在といふ自己超越の媒介性が、正にその直觀の直接性を否定するではないか。それは否定媒介の絶對轉換に於ける、超越と内在との相即である。信仰といふ概念は之を表はす。併しそれは必然に行爲の轉換に即し未來の希望に還相する。これが飽くまで有限存在として死即生の轉換に於て、行爲的のみに、無限の超越に媒介せられる人間の、時間性に外ならない。

信仰は單に永遠の今に於ける超越との直接合一たる神祕的直觀ではない。それは斯かる直接態の正反對なる否定的媒介なのである。それであるから統一は飽くまで否定的矛盾的であつて、必然に無限なる反復過程に動化せられる。行爲に於ける希望の延長的なる所以である。前に問題にしたやうな永遠に於ける時の空間化、靜止化といふ如き傾向は、此媒介の動性延長性を忘れる直觀主義に屬する。今展開したやうな否定媒介の立場には、此傾向を許す餘地はない。ただ未來の行爲に於ける否定的媒介性を十分明にせず、それを過去と同列的にこれに對立せしめる結果、却て此媒介性を稀薄ならしめる爲にこれに陥るのである。信仰と希望との媒介關係は之を不可能ならしめる。永遠の今

immediatus は、永遠の未來 *futurum verum* と相即する動靜一如としてでなければ成立しない。信仰と行爲と希望との三一的統一は、永遠と時間との往相即還相的なる轉換媒介を超越的存在論と内在的現象學との相即に於て自覺せしめるのである。併し此様な媒介の立場に立つて過去を考へるならば、過去もまたその中に潜在せしめる所の否定媒介の關係を展開して、表面上直接的なる記憶の意識は止揚せられ、より具體的なる高次の意識を發展せしめるのは當然である。過去の記憶が過去の記憶であるといふことは、既に否定を含蓄し、持続が持続であるのは最早單なる持続の止揚であるといふことは、上に見た所である。今や現在は必然に絶對否定的であり、過去の有に對する未來の否

定の媒介統一としての行爲的轉換に成立するものであるとするならば、過去が現在の記憶に於て持續として意識せられるといふことが、必然に之を否定的媒介的ならしめ、却て未來の否定を媒介として肯定に轉ぜられ、永遠の還相として未來に向ひ無限の希望に延長化せられる現在の動性が、逆に過去をも延長化してそれを持續たらしめるのであるといはなければならぬ。現在の絶對轉換性は過去を單に既存在の持續たらしめることを許さない。却て之を未來の媒介により否定して循環的に交互轉換せしめ、未來を過去に媒介すると同時に過去を未來に媒介し、その意味に於て過去を未來化するのである。永遠に於ける過去と未來との交互轉換に就きては、前節に豫め懺悔の現象を以て之を例示したが、これは正に過去の否定的媒介による高次展開に外ならない。如何なる過去も時の永遠還相に反對して、未來との否定的媒介を拒み、單に現狀維持的に自己を保存する持續性に固執するならば、それは信仰の立場から見ていはゆる舊き人間の罪惡に沈湎することを免れない。持續も絶對否定の永遠の還相としては、不斷の死即生なる甦生回復でなければならぬ。それは舊きものの死にして新しきものの生であるから、回復にして創造である。死による否定を損失として積極的に考へれば、回復は損失の償却にして更に新なる獲得であるから、一度失つた所を二倍にして回復するともいはれる。キエルケゴールが『反復』に於て、舊約の約百が神の試煉に堪へ、自己の義を信ずると共に神の正義に對する信仰を持續した曠に、神は約百の財産所有を二倍にして回復したことを、信仰の反復現象に對する例證としたが、その意味に於て持續は二倍の回復たる反復でなければならぬ。その一半は創造に外ならない。但、その回復と創造とは、飽くまで相互媒介的であるから、之を半分づつに分つことは出來ぬのである。それは正に同じものの反復であつて同時に創造新生たるのである。此様な創造的反復の轉換的動靜一如に、過去と未來との統一せられる

現在の瞬間は成立する。それは永遠に始まり永遠に終る永遠の超越的内在である。キエルケゴールがエレヤ主義とヘラクレイトス主義との綜合を此反復に見んとするのは正しい。ヘーゲルの *Meditation* を靜的水平化として實存の喪失と考へ、極力之を排するのも、理由なきことではない。反復は正にこれに代はるべき概念であらう。ベルグソンが持續を實的内容的には創造的進化としたのも、その正しき意味は此の如き反復の持續でなければならぬ。斯かる意味の持續に於ては、持續の半面は不斷の否定、死滅でなければならぬ。ベルグソンの思想の抽象は此否定を十分に自覺しない點にある。若し此否定死滅を拒んで直接なる持續に執するならば、それは私心我執の罪惡に外ならない。これは懺悔に於て止揚せられなければならぬ。それが救済への轉機である。而も此我執はいはゆる原罪とか根本惡とかいはれるものとして、人間存在に固有なるものであるから、單なる有限存在としての我々の自力の能く脱し得る所ではない。この自己脱離の努力に於て我々は必然に自己の無力に對する絶望悔恨を免れることは出来ぬ。従つて懺悔の半面には絶望を伴ふ。この絶望の「死に至る病」が、死の希望をも否定するといふ自己否定に於て却て絶對否定に轉せられることにより、救済が成立し、絶望の絶望として絶對の希望が反復を通して發現する。其意味に於ては、懺悔が救済への轉機であるといふよりも、寧ろ救済の絶對轉換が、却て懺悔の否定轉換を成立せしめるのである。懺悔は信仰の過去に對する還相なること、未來に對するその還相が希望なると對應する。前者が否定的であり後者が肯定的であることに、時の一方方向性、即ち過去の否定性と未來の肯定性とが示される。現在が反復であるといふことが之を證する。併しそのいはゆる否定も肯定も、單に直接的なるものでなく媒介せられたものであるから、却てまた相互に轉換的でもあるのでなければならぬ。この事は、未來の希望が却て信仰に於て、過去からの約束を含蓄することに、示

されるであらう。

成程信仰に於て過去は舊きものとして否定せられなければならぬこと今見た通りであるが、併しそれは未來の否定に媒介せられることを拒む過去の直接的持續であつて、反對にそれが懺悔を通して永遠の立場から未來の否定と媒介せられ、未來の希望と轉換的に統一せられるならば、却て過去は未來の希望と相即する約束となる。希望は信仰の未來的還相であり永遠の時間的動化延長化であるが、それが此否定的媒介に於て過去に循環的に聯關せしめられるならば、同時にそれは過去に於て既成的にその希望の達成が約束せられて居たことを要求する。信仰は未來に向つて希望に還相すると同時に、それとの媒介に於て、過去に向ひ約束に還相しなければならぬ。寧ろ過去からの約束に媒介せられて、信仰は希望に還相するといふべきであらう。宗教に於て約束が如何に重要な意味を有したかは、イスラエル宗教の契約思想を見ればわかる。永遠は無媒介に意識に現れることは出來ぬ、過去の既成なる約束を媒介にして信ぜられるのである。約束と希望とに於て、始めて永遠の信仰は過去未來の兩方向に向ひ時に還相する。而も約束の既成は希望の行爲的達成に於て實證せられることを求めるものであるから、飽くまで行爲に媒介せられ未來の希望に自己を結合するのであつて、逆に希望の達成が直接に約束により充されるのではない。依然として兩者は交互的循環的でありながら、全體として過去から未來に向ふのである。それが兩者を媒介的に成立せしめる現在の絶對否定の構造に外ならない。但、その約束の既成といふことによつて、現在の行爲も、單に未來の希望に支へられて努力するといふ意味に止まらず、その希望達成の約束に對する感謝報恩の行たる意味をもつやうになるのである。時の理解の第一歩は、却て時の絶對否定なる永遠の現在に於けるその否定的媒介を明にすることであるが、併しそれは現在に於ける

永遠の直観に、過去と未來とを記憶と豫期といふ如き現象に於て、無差別的に統一することであつてはならぬ。此第一の往相面に對する還相面に於て、第二に統一の循環的媒介が、同時に自己否定的矛盾的なるものとして、一方向的なる流動延長に還相し、それに於て未來は過去に對し、行爲の絶對否定の動的尖端として永遠の信仰と相即する希望となり、否定せらるべき過去が懺悔の内容たるに對して、希望は飽くまで肯定的であると共に、却てそれと媒介せられる過去を、希望達成の約束として肯定に轉ずる、過去と未來との否定的媒介關係を、明にしなければならぬ。此還相的媒介は行爲の現在に於ける永遠の絶對無によつて成立するのであつて、絶對無の飽くまで非直接的媒介的でないければならぬといふことが、直接の有たる過去を否定せらるべきものとし、その否定的對立としての未來をその否定の否定として肯定的ならしめ、過去と未來とを決して無差別的並列的ならざる媒介關係に統一するのである。過去は行爲に對し否定的に對立するものであつて、行爲を制約するけれども、逆に行爲により直接には支配せられない無媒介者である。それに對し未來は、飽くまで行爲に媒介せられるものであつて、行爲に制約せられることなき單に豫期の對象たる如き未來といふものはない。ここに前述の如く、永遠の還相としての時が一方向的であつて非可逆的でないければならぬ所以が、存するのである。ただその媒介の交互性に於て過去と未來とが轉換せられ循環的となる關係が、全體の一方性の内部に契機として含まれることにより、永遠の絶對否定が時を超える關係は間接に示される。斯かる媒介は總て行爲の現在を中心として成立するのであるから、時を成立せしめるのは行爲であるといつても過言ではない。種々なる時間論の抽象性は、此中心を捉へずして單に觀想的従つて非轉換的同一性的に、時を解釋しようとする結果に外ならないであらう。キェルケゴールが過去の記憶と未來の希望とに對し、現在の反復を以て永遠が時

に觸れ、超越が内在に轉ずる絶對の轉換たる瞬間の構造と考へ、これによつて實存的に時を理解しようとしたのは卓見であるといはなければならぬ。

四

前節に明にした如く、過去と未來とは、現在の行爲に對し同等なる對稱的關係を有するものでなく、前者は直接なるものとして行爲に對立し、これによつて否定せらるべきもの、従つて直接には行爲に媒介せられず行爲の外に立つものであり、逆に行爲を制約するものであるに對し、未來は行爲に媒介されたものであり、其限り行爲に制約せられるのであつて、行爲の媒介なしに單に豫期せられたものは、記憶の内容が過去である如き意味に於て未來であるのではない、否、行爲なくしては豫期といふこともあり得ない、といふ根本的な差別を有する。これは時が永遠の絶對無の還相として成立することの必然の歸結である。併し此様に永遠の絶對無が現在に於て行爲に現成するといふことは、更に一層精密に考へて見なければならぬ。

記憶に於ける過去の持續が持續である爲には、持續は却て持續の否定なる契機を自己の内に有しなければならぬことは、前に述べた通りである。それ故持續が持續として意識せられることが、既にその否定的媒介的なことを意味するのであつて、單に記憶の内容が直接に過去の保存として存在するといふことではあり得ない。意識は常に現在に成立するもの、否、意識の成立する所が現在なのであるが、現在は同時に行爲の成立する所である。然るに行爲は意識から出發しながら意識を超えて其外に出で、その意味に於て意識を否定して、復び意識に還るものでなければな

らぬ。單に意識に止まるだけでは行爲といふものはない。行爲が身體の運動を通じて物質と關係すると考へられる所である。物質とは意識の否定者にして、行爲により意識と媒介せられる絶對無の否定契機に外ならない。意識は此絶對無の否定的媒介の自覺である。その否定的媒介が意識の物質による否定、即物質の止揚による意識の回復肯定、として、絶對無の現成と見られたものが行爲である。現在が意識の否定的媒介として、超越即内在なる行爲の成立する永遠の現成たる成以は、これによつて認められるであらう。過去の記憶が持続として現在に存在するといふことは、意識の斯かる行爲的否定的媒介に入込むといふことに外ならない。過去の記憶は、その否定を、永遠の絶對否定によつて加へられるから、却て持続するのである。意識は斯かる矛盾的逆説に成立する。ベルグソンが持続を滲透として、比喩的に言表はすのもこれに外ならない。併し滲透或は相互貫通として形容せられる此否定的媒介は、過去の現在に接觸する所、即ち持続の意識が記憶として成立つ所、に注意すべき事態を發生する。元來意識の否定といふものは、ベルグソンが虚無の論に於て明にした通り、それ自身一の意識でなければならぬ。單に無媒介なる直接の虚無といふものは、却て存在であつて虚無ではない。虚無は存在の意識を否定するものとして意識の内にありながら、意識に對立する契機たるのでなければならぬ。意識の否定も否定の意識であるといふ矛盾事態に、意識の原理が絶對無でなければならぬ所以が認められる。ところで斯様な矛盾的對立に於て過去が現在に觸れる所に、記憶の意識が發生するとするならば、此意識は相反對する力の對抗を内に含むものとして、單なる點に還元することは出来ないものでなければならぬ。それは對抗がなほ統一を破らずして對抗として意識せられたものなる限り、轉換的なる絶對無の交互に否定的なる契機として統一せられる循環的動的圓環が、生即滅、滅即生の渦動に於て成立することを意味する。

従つてそれは飽くまで無次元の點でなく無限に高次に進む渦旋ともいふべきものでなければならぬ。キェルケゴールが復活甦生の前の非存在は、最初の生誕の前の非存在より以上のものを含むといつたのは、眞に深い考である(『哲學想片』)。過去の意識もそれが意識である以上は、斯かる否定的媒介の動環たるのである。それだから斯かる記憶の意識が、厚みのある(無次元でなく次元をもつ)現在に成立つのである。ところで現在に於て過去を否定する契機は、前に見た通り未來に屬するものである。過去は持續として記憶により意識せられる限り、既にそれを否定する未來の契機を伴ふ。未來の契機を含まずしては過去として成立つことが出来ない。過去が持續的に存在するといふことが、同時にその未來に否定せられて無に瀕することを意味する。それは無に於て有るのである。併し他方から見ると、過去は既に有るのである。意識に對し記憶として直接現前するのである。其故過去の意識は自己を否定する未來を契機として伴ふに拘らず、之を即目的に含むに止まり、對目的に顯現することは無い。所謂潛勢として未來を含むも之を現勢化しないのである。ここに過去の直接性非行爲的無媒介性が存する。それは無に於てあるに拘らず、なほ端的に有るのである。過去は既にあつたもので現在あるのではないけれども、而も記憶に於て持續し現在を制約する勢力として有るのであつて、未來が未だあらざるものとして無いのとは異なる。そこに過去と未來との非對稱性がある。過去は無くして有り、未來は有つて無いといふことも出来るであらうか。

即ち反對に未來に於ては、それが過去の有を否定する無であるによつて、後者の如く直接的有であることは出来ぬこと既に前に見た如くであつて、それは否定の性格たる媒介性に従つて本來媒介的なのである。それは必然に自己の否定すべき有を過去に於てもつのでなければならぬ。飽くまで無媒介的直接的なる過去と異なり未來はその本性上媒介

的である。それはその内に否定すべき過去を契機として含み、これとの對立對抗に於て否定としての自己を意識するのである。それが有つて無いともいはれる所以である。未來に於ては無が顯はになつて居る。現在は未來の方に向つては無に臨むこと、過去の方に向ふ場合とは異なる。現在の底にある絶對無の根柢は、未來の無の深淵に於て動く。此深淵に身を投ずる覺悟を以て未來に向ひ動くことが、却て無底の根柢を自己に獲得して永遠の生命に甦る所以なのである。未來は過去の持續を否定することに、その未來性を成立せしめる。併し今まで度々述べた如く、直接の無といふものはない。無は必ず有の否定として有を媒介とし、未來は過去の否定として却て過去を契機にもつのである。而もその否定として意識せられるといふことが、既に意識の肯定でなければならぬから、それは過去に替るべき有としての内容をもたなければならぬ。その限り無が有を否定するといふのは、即無の自己否定に外ならない。未來に於ては過去の舊き有が消滅しながら、而も媒介契機として保存せられ、保存せられるといふことが却てその否定として、それに替る新しき有の創造たるのである。媒介せられた否定に於ては、否定は却て創造でなければならぬ。併し創造は無媒介なる虚無からの創造ではない。何となれば直接なる虚無は却て虚無でなく存在に外ならないから、存在する有から有が創造せられるといふ矛盾に陥るが故である。然らずして創造は否定と表裏しなければならぬ。否定が創造であり創造が否定である。一方なくして他方があることは出来ぬ。過去の有が否定を無として含むといふのは、具體的には過去が常に未來の創造と否定的に對立し、而してこれに否定的に媒介せられることに外ならぬ。持續も創造の否定に媒介せられて持續たる事が出来るのである。併し過去の持續には此否定的創造は飽くまで即自的に潛勢として含まれるに止まる。それが對自的に現勢化せられるのは未來の否定的創造に於てである。その未來の創造

が否定に於て自己の媒介として保存するものが、過去の持続に外ならない。媒介的な否定即創造の未來には、必然にその契機として過去の持続が含まれる。それは最早過去の場合に於ける如き潜勢的媒介でなく現勢的媒介として、過去を否定しながら之を保存し媒介となすのである。そこに於ては轉換の圓環的構造は明白に顯はれる。過去の保存の契機と未來的創造の契機とが、互に對立し抗争して渦卷くからである。それが現在に於ける未來の豫料を形造る。従つて此未來の意識には顯はに對立抗争が存し、前に豫料の不安的構造について述べた如く、無の不安と創造の希望とが錯綜するのである。従つて斯かる未來と過去とを同時に契機として綜合する現在の意識には、必然に此様な對抗錯綜する勢力の拮抗が含まれる。それは過去が未來に向つて否定的創造的に發展することを妨げる停頓阻止に外ならない。物質とは之を謂ふのである。物質が古代に於て乾濕冷温の對立を原素として理解せられ、現代に於て陰陽兩電氣を原理として考へられることを通觀しても、それが對立性の原理に由る對抗凝止の現實契機なることは認められるであらう。それは現在に於ける行爲の否定契機として、その媒介統一を阻止せんとする對立性に外ならない。過去と未來との現在に於ける否定對立は、必然に物質の契機を顯はならしめる。それは又對立抗争する力の互に外的に並存し對抗する同時存在としての空間を、成立せしめることも容易に觀取せられるであらう。空間は、時間を否定的に超えるその超越的根柢としての永遠を、時間の否定契機として時間そのものの立場に引降したものである。時間を離れて空間があるのでない。却て空間は時間の否定契機なのである。併し否定契機として永遠の絶對無そのものに由來するのであるから、ベルグソンの如く之を單に時間の緊張に對する弛緩として具體的に理解することは出來ぬ。それは單に斯かる量的對立として解する能はざる否定的對立をなすと同時に、却て否定契機として互に媒介し合ふのであ

る。空間は永遠の絶對否定に於ける否定契機として、時間の成立に缺くことが出来ぬものである。アウグスティヌスがベルグソンと異なり、初めから時を量的測定の見地から考へ、その成立の根柢として現在の延長を説いたのは、此點から見て正しい。時間の現在が無次元の點でなく動環として次元をもつといふことは、更に具體的にいへば、時間と空間との統一としての世界點が、却て點でなく動環的有次元單位であるといふことを意味する。此單位を世界量子とでも名づければ、これが世界の空時的統一の單位として世界に於ける存在の量子に相當する筈である。今日の物理學の最根柢課題たる、相對性論と量子論との綜合は、右の如き時間空間物質の勢力的力學的反省によつて解決の方向が掴まれないかと考へるのも、必ずしも私の、専門外の妄想とばかりはいはれまい。とにかく永遠の時間還相に於て空間の有すべき媒介契機としての必然的意義は、右の如きものと信ぜられる。然らば現在そのものの現在としての成立は如何に解すべきであらうか。

過去と未來との對立抗爭が兩者の否定的媒介の行爲に於ける統一を妨礙し阻止するのが、今述べた如く物質の力學的意味であり、時の否定契機としての空間が永遠の時間化として成立するのも、此現在の停頓凝滞にありとするならば、現在の現在としての成立は、此物質の妨礙を却て自己の媒介に轉じ、空間の否定契機を媒介として永遠に往相することにより、同時に永遠の現成として時に還相する行爲的轉換を外にしてあり得ない。いはゆる身心脱落に於て物質即自己、自己即物質となり、空間が永遠に於て時間に轉ぜられると共に時間が永遠たるのが、現在の成立である。此轉換を超越的根柢にはたかられて自己が行ふことが、行爲である。それだから現在は、行爲の成立に於ける過去未來の媒介統一なのである。過去の即自態と未來の對自態とに對する即自且對自態なる絶對無の現成が、現在に外ならぬ。それは時にして時の否定超越なる永遠の現成であり、未來の無を絶對無即有に轉ずる永遠の還相である。今まで

單に有つて無いものに止まつた未來の否定性を、有即無、無即有の肯定に轉じ、單に可能として希望せられた創造を現實に實現するのが現在である。それ自身に於ては媒介がなほ即自的に止まり、實は無媒介なる直接性に於ては自己否定的であつたところの過去を、未來との否定的媒介に於て回復するのも、此現在の即自且對自態に於てでなければならぬ。現在は斯かる否定的媒介態であるからそれ自身として直觀せられるものではない。行爲的に之を行ふことに於てその媒介を自覺する外ない。行爲的直觀といふ如き概念は、無の直觀といふ概念の如く本來自己矛盾である。行爲は直觀の否定であり直接態の否定であるによつて行爲であり無の現成なのであるから、斯かる概念を單に逆説的として許すことは出来るものでない。逆説を形造る對立は行爲的媒介的であることによつて統一せられるのであるが、此概念の意味する所は行爲的媒介そのものの否定であり拒絶であるからである。斯かる概念が無の還相を見失はしめ行爲の未來性を無視して時の動性に背く傾向に導くのは當然である。超越的なるものに轉換せられて自己を失ふことが、却て自己の現成なる如き行爲は、直觀出来るものではない。行爲は直觀を否定し、現在は意識を越えるによつて、行爲であり現在であるといふのに、之を直接に結合するのは非媒介的であり非行爲的でなくて何であらうか。現在は直觀せられるといふ思想こそ、我々の批判の對象でなければならぬこと、此論文の初から明白であつた筈である。現在は有として直接に意識せられればそれは直ちに過去に化する、といふことは容易に氣附かれる所であつて、何人も之を口にする。併し現在がその絶對無性に於て意識せられようとすれば、却て未來の構造に於てしなければならぬ、即ち永遠は轉換反復を通じ未來の希望に即して意識せられ、その絶對否定性は未來に係はる行爲の構造に於て自覺せられなければならぬ、といふことは多く忘れられて居る。更に之を媒介として、過去が懺悔と約束との媒介性に於て、永遠の還相たる如きことは一般に注意せられない。而して此等の媒介態が直觀せられるものでなく、行爲

的自覺に於てのみ成立することは、いふまでもあるまい。行爲は直觀せられない、ただ轉換反復に於て自覺せられるだけである。然るに自覺は、直觀が直接無媒介として還相性を缺くが故に従つて無方向的なると異なり、飽くまで媒介的であり、従つて時の中に於て時を超えながら、時に還相するものとして未來への方向を有するのである。故に現在は未來の行爲的媒介に於て、換言すれば現在の行爲に於ける永遠への往相が、即未來への還相として、未來の行爲的構造に自覺せられることに於て、始めて間接に意識せられるのである。この未來への行爲的還相が、永遠の現在を自覺し意識する唯一の方法でなければならぬ。ここに我々の進むべき方向がある。前にいつた如く、未來が有つて無いものであるとするならば、如何にしても未來を直觀するとはいへまい。然るに未來を媒介としてのみ現在が意識せられるとするならば、現在の直觀といふことが意味を失はなければならぬことも疑無い。直觀せられるのは却て過去の有である。それが記憶として過去に關係せしめられるのは、既に前に述べた如く、否定を含み媒介を即自的に潜勢として意識することによる。此媒介を飽くまで抑へて未來の對自態に發展せしめず、前述の意味に於て、物質の凝滞として之を空間性に同時化したものが、現在の直觀といふべきものであらう。それは恰も空間が時間性の契機としてでなければ成立しないのに、それが自立的に直觀せられるかの如くに考へて、抽象的に空間直觀といふことが語られる如き意味に於て、時間の發展の内に存する永遠の契機を抽象的に直觀するものに外ならない。それを捉へたといふことが直ちにその喪失であつて、いはゆる現在の直觀が直ちに過去の記憶に化する所以である。具體的なる現在の意識は斯かる直接的即自態としての過去の方向にでなく、未來的行爲の否定的媒介の方向に、成立するのでなければならぬ。キェルケゴールが、記憶とは方向の正反對なるものとして反復を規定した所以である。現在の意識が直ちに過去から未來への發展の意識であるといふのが、時の意識の構造に外ならない。過去が未來へ滲透すると

いふことが同時に未來が過去から滲出すといふことである如きベルグソンの純粹持續は、斯かる意識の内容を成す。併し其様な比喩的持續の内容は、右の如き絶對無の永遠の還相として、否定的媒介的に反復に於て時の現在を成立せしめるのであつて、それは過去の持續に於てでなく却て未來の行爲的否定的媒介に於て、成立するのでなければならぬ。而して現在が過去に化するといふことは、同時に未來が行爲の現在に轉ずることを意味するのであつて、それは未來として阻止凝滞せしめられた物質が、永遠の絶對轉換によつて超越せられ、現在の否定的媒介となることに外ならない。過去から未來に發展する現在の動性は、物質の阻止凝滞を自己の否定契機に轉じて永遠を現成せしめることに成立つ。持續は直觀に屬するのでなく此様な行爲の否定的媒介に成立するのであつて、その外に物質を自己に對立する弛緩の原理としてもつのではなく、自己の内に之を否定契機として媒介するのである。而して斯かる否定的媒介なるが故に、現在が過去に化し未來が現在に轉ずる連續的運動が、同時に圓環的統一と相即し、後者の非連續的轉換の反復重疊が、前者の連續を過去の過去、未來の未來といふ如き高次元に、無限に組織することが出来るのである。フツセアルが把住の把住、豫占の豫占として時の持續を分析することに於て、ベルグソンの上に出でることを自信したのも、必ずしも理由なきことではない。併し此様な志向作用の反復重疊は、具體的には現在の絶對無的永遠の行爲的還相としての否定的媒介に、依るのでなければならぬ。然らざれば過去の把住と未來の豫占とが、現在に於て如何に轉換媒介せられるかを理解することは出来ぬ。現在を單に直觀に委ねて、超越的轉換の行爲によるその具體的成立を忘れる現象學の、制限がそこにある。現在の直觀が過去と未來とに對し無差別的對稱化の傾向をもつことも、またフツセアルに於て猜せられないではない。ただ現在の反復に於ける行爲の未來的媒介性のみ能く之を脱せしめるのである。(未完)